

東南アジア古典文化論 青山 亨

東南アジアの「インド化」をめぐって

【このユニットのねらい】いくつかの設問を通じて1学期の講義の要点を整理する。

《アニミズム》

【01】 東南アジアの基層文化としてどのような特徴をあげることができますか？

【02】 唯一神の神、多神教の神、精霊信仰のカミについて、あなた自身はどのように理解していますか？

【03】 ある社会の信仰のあり方を「アニミズム」と規定することについて、どのような長所と短所がありますか？

《「インド化」について》

【04】 東南アジアのインド化とはどのような現象か、セデスはどう定義していますか？セデスの定義に付け加えることはありませんか？

【05】 現在の東南アジアの社会・文化の中で、インド化の影響はどのような部分に見つけることができますか？（レポート1を参考に）

【06】 「インド化」の研究はしばしば東南アジアの偉大な過去の栄光（アンコールワットなど）を賞賛する結果となりましたが、このような傾向に対してどのような批判がおこなわれていますか？

《インド的王国》

【07】 インド的な王国の形成には、複数の段階があったと指摘されています。それらはどのような段階であったと考えられていますか？

【08】 ベトナム北部を除くと、東南アジアの初期王国は中国文明よりもインド文明の影響を強く受けています。その理由は何でしょうか？

《仏教》

【09】 インドネシアのボロブドゥール寺院は仏教のどのような発展段階を反映していますか？寺院のどのような部分にその根拠を示すことができますか？

《ヒンドゥー教》

【10】 インドネシアのプランバナン寺院においては、どのヒンドゥー教の神々が、どのように表現されていますか？

## 東南アジアの「インド化」のまとめ ver 20100722

## なぜ東南アジアでは「インド化」が先行したのか？

- ・ 東南アジアでは中国に隣接するベトナム北・中部において、前 111 年の漢による軍事征服以来、中国化（漢字、儒教、道教、中国仏教の導入など）が進んだほかは（フィリピン群島などの島嶼部東部を除くと）インド文明の圧倒的影響を受けた。
- ・ 中国化：漢字、儒教、道教、中国仏教の導入、律令制、科挙（日本以外）、冊封体制
- ・ 中国文明の中心地は黄河・長江流域であり、中国文明の影響はこれらの河川が流れ込む東シナ海に向かった（朝鮮半島と日本）。それに対して、インド文明の中心地はガンジス川流域であり、この川が流れ込むベンガル湾周辺地域に対してインド文明の影響を及んだ。
- ・ 中国では、南北朝時代の南朝に宋・齊・梁・陳が建ったものの、基本的には宋代（とくに南宋）になるまで華南の開発が進まず、華南は長く辺境と考えられていた。例：『諸蕃志』『島夷誌略』。それに対して、インドではベンガル湾の東方はある種の理想郷（エルドラド）と目されていた。例：Suvarṇadvīpa（黄金の島）。
- ・ 中国文明の中心地から見ると華南・南海は異なった環境であったが、インド人にとっては親しみのある環境であった（熱帯モンスーン）。
- ・ インド洋ではメソポタミア・地中海・インダス文明などが文明間交流の舞台であり、遠洋航海技術が発展した。このことがモンスーンの発見と利用につながる。インド人は遠洋航海による貿易活動に早くから参加した（例：ジャータカ）。
- ・ 総じて「インド化」の時代にはインド文明は相対的に中国文明よりも「魅力的」であったと言える。中華中心主義の中国人があえてインドまだ仏典を求めにいったことの意味は大きい。

## 補足. 技術面から見たインド化

- ・ インド化によってもたらされたものは観念体系だけではない。技術面も重要である。なかでも稲作農耕は重要である。
- ・ 水稲農耕はインド型稲作が普及する前から東南アジアに存在。

## アジアでの稲栽培

- ・ 中国の長江下流の遺跡で前 5000 年頃の水稲農耕集落と栽培稲が出土（前 7000 年までか？）。近年では華北でも出土。
- ・ 東南アジアでは後期新石器時代（前 2 千年紀＝前 2000～前 1000 年）から初期金属器時代にかけてのタイ、ベトナム、マレー半島、サラワク、フィリピン、スラウェシの遺跡から出土。
- ・ タイでは前 2000 年頃には水稲を含む稲作があり。ジャポニカ米（短粒米）。  
新田栄治「東南アジアの農耕起源」梅原猛、安田喜憲編『農耕と文明』（講座文明と環境3）朝倉書店、pp.184-202, 1995.

- ・ ただし、焼き畑（陸稻を含む）は水稲農耕と並行して卓越して存在（地域差あり）。
- ・ 「生産性の高い水稲農耕が確立して初めて、人口の集積、高度な文化の受容と維持が可能となった」とされるが、焼き畑の生産性を過小評価している？
- ・ 5・6 世紀から 12・13 世紀の間にインディカ米（長粒米）を栽培するインド型稲作が普及。
- ・ 東南アジア大陸部の平原・デルタ部において 10 世紀頃にはインディカ米（長粒型）に転換
- ・ 東南アジア大陸部の平原・デルタ部の伝統的農業に見られる畜力犁耕、散播、鎌刈り、牛蹄脱穀はインド式農耕。また、溜池灌漑もインド系の稲作技術の一環。